

学びの振り返り活動の促進と可視化に向けた試み

An Initiative to Promote and Visualize the Reflection Practice in Learning

浅野 あす香 久保田 真一郎 喜多 敏博 戸田 真志
Asuka ASANO Shinichiro KUBOTA Toshihiro KITA Masashi TODA

熊本大学 大学院社会文化科学教育部 教授システム学専攻
Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

＜あらまし＞ 本研究では、学習者による継続的な振り返り活動を支援し、得られたデータを学習成果として活用するための仕組みの検討と、その有効性を検証することを目的とする。講義終了時にループリックによる自己評価と到達度確認を実施し、評価結果は可視化ダッシュボードと同期される。評価指標の検討と方略の設計・運用を通じて、リフレクションの定着とデータの活用可能性を展望する。

＜キーワード＞ リフレクション、ループリック、自己評価、教育データ活用、内部質保証

1. はじめに

高等教育機関では、教育の質保証・質向上の実現のために学習成果の可視化への取り組みが進んでいる。文部科学省が令和2年に行った調査によると、高等教育機関では、レーダーチャートによる成績の可視化、GPAの表示、eポートフォリオによるリフレクション等、特色ある取り組みが行われている。

松下（2016）は、学習成果は複合的な指標で評価することにより信頼性のあるデータとなることを示し、学習成果の評価を捉える3つの分類軸やエビデンスについても言及している。

松下（2016）の分類に基づき検討すると、客観テストや質問紙調査等は、多くの高等教育機関や企業によりシステムの開発や実践が行われている。

多様な評価方法のうち、質的間接評価である「学習者の自己報告による学習成果の評価方法」や質的 direct 評価としての「ポートフォリオ評価」のための手法として、eポートフォリオを導入している機関もあるが、システムを導入するだけで成果が可視化されるものではなく、運用や活用においては課題も多く見受けられる。

2. 研究目的

上記の背景に基づき、本論文では、多様な評価方法のうち、質的間接評価である「学習者の自己報告による学習成果の評価方法」に着目する。学びの振り返りの教育効果を再調査した上

で、定期的かつ継続的に学習者や教員が評価を行い成果を確認するための仕組みとして、必要な支援とシステム・方略を検討することを目的とし、学習成果の可視化に向けた有効性を検証することを視野に、振り返り活動の定着を促す設計を提案する。

3. 方法

3.1 提案する手法

本論文における振り返り活動の進め方は以下の通りである。学習者は、講義終了時に講義の振り返り活動として、学習管理システム Moodle の自己評価ループリック指標を作り、各講義の振り返りを実施する。

教員は、成績評価時に学生の学習目標達成度と評価ループリックによる評価を実施する。

自己評価ループリックにはリフレクションに対する評価指標を含み、学習目標達成を測るための自己評価ループリックの指標にはリベラルアーツ教育の掲げる「幅広い知識や多角的な視点」「問題解決能力」「批判的思考力」を評価する指標を含む。

それぞれのデータは統合され、Power BI で構築したダッシュボードで可視化される。

3.2 研究内容

本節では、具体的な研究の進め方について説明する。

まず、振り返り活動の教育効果を再調査した上で、定期的・継続的な振り返りを実現するた

めの支援方法の設計を検討する。

次に自己評価についての学習方略の効果を調査し、設計を検討する。

先行研究事例を参考に、モデル講義の自己評価/学習達成度ルーブリック指標の検討と試作を行い、Moodle のルーブリック機能のテンプレートとして実装する。評価データは、Moodle と Power BI の API 連携により、同期する。

並行して、評価のためのアンケート・インタビュー項目の作成を行い、効果検証する。

3.3 ルーブリック指標の作成と検討

以下の3つの科目群でルーブリック指標の検討を実施する。

- (1) リベラルアーツの3分野（人文科学・社会科学・自然科学）基礎科目
- (2) 全学生の必修科目
- (3) 学際的な科目

3.4 プロトタイプの仕様

Moodle と Power BI は API 連携し、ルーブリック評価データを同期し表示する。

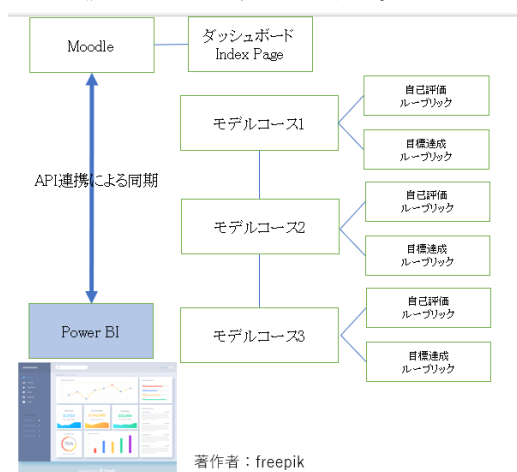


図1. プロトタイプイメージ

3.5 評価

プロトタイプを試行し、以下3点について、専門家、教員、学生のインタビューを行う。

- (1) ルーブリック指標についての妥当性
- (2) 振り返り活動の定着・効果について
- (3) 可視化されたデータの有用性

4. 終わりに

本論文では、Moodle のルーブリック機能を活用した振り返り活動の設計を提案した。リフクションの定着を目指し、学生・教員双方が主体的に学習を確認するための設計・運用した点に本研究の意義がある。しかし、学習者の自己評価データは主観的要素を多く含むため、信頼性を高めるためには、教員評価との比較やその他の定性的データとの組み合わせも必要となるだろう。各高等教育機関の特色を出すデータとするためには、自由記述の分析も有効ではないかと考える。

また、この研究成果を実践に落とし込む際には、学習者や教員がツールの利用方法や振り返り活動の意義を理解し、効果的に実施するための研修やサポート体制の整備も重要だと考える。

今後は、実装性と信頼性を高めるために、課題整理とさらなる実証をすすめていく。

参考文献

- 松下佳代 (2016). 「アクティブラーニングをどう評価するか」
- 松下佳代・石井英真 (編) (2016)『アクティブラーニングの評価』東信堂, 3-25.
- 山田 嘉徳, 森 朋子, 毛利 美穂, 岩崎 千晶, 田中, 俊也 (2015) 学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討. 関西大学教育開発支援センター 関西大学高等教育研究 6 21-30, 2015-03-31
- 松下佳代 (2022) ,大学教育学会誌 44 (2), 143-148, 2022-12 「汎用的能力の育成と評価の可能性 ―ミネルヴァ・モデルを手がかりに―」 <https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/286514>, 2025 年 6 月 15 日閲覧
- 株式会社リベルタス・コンサルティング (2020), 令和2年度 文部科学省委託調査 「教学マネジメントの確立に資する 事例の把握等に関する調査研究」 https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1418380_00003.htm